渡り鳥

岩波写真文庫　203

岩波写真文庫 203 渡り鳥

編集 岩波書店編集部 監修 清棲幸保
写真 清棲幸保 岩波映画製作所

ウミネコ(山形県勝木海岸)

はじめに

いきものがその環境によって身体も変り、生活をそれに適応することができるなら、なぜ鳥のなかのある種のものがあんなにまでひどい苦労をして渡りをするのだろうか。その原因の探求はともかくとして、季節によって生活する場所を変える鳥の種類は意外に多い。あるものは国内のわずかの部分を移動するだけであるが、あるものは遠く北極に近いところから飛んで来て、また帰ってゆく。南から来て南へ帰るものも同じだ。アルプスを越えるツバメの話など、人の心に訴えるものがある。この本ではわが国に来る代表的な渡り鳥の生態を描いた。これはカメラと根気だけでできる仕事ではない。渡り鳥への深い愛情がこの本を作ったのだ。

目 次

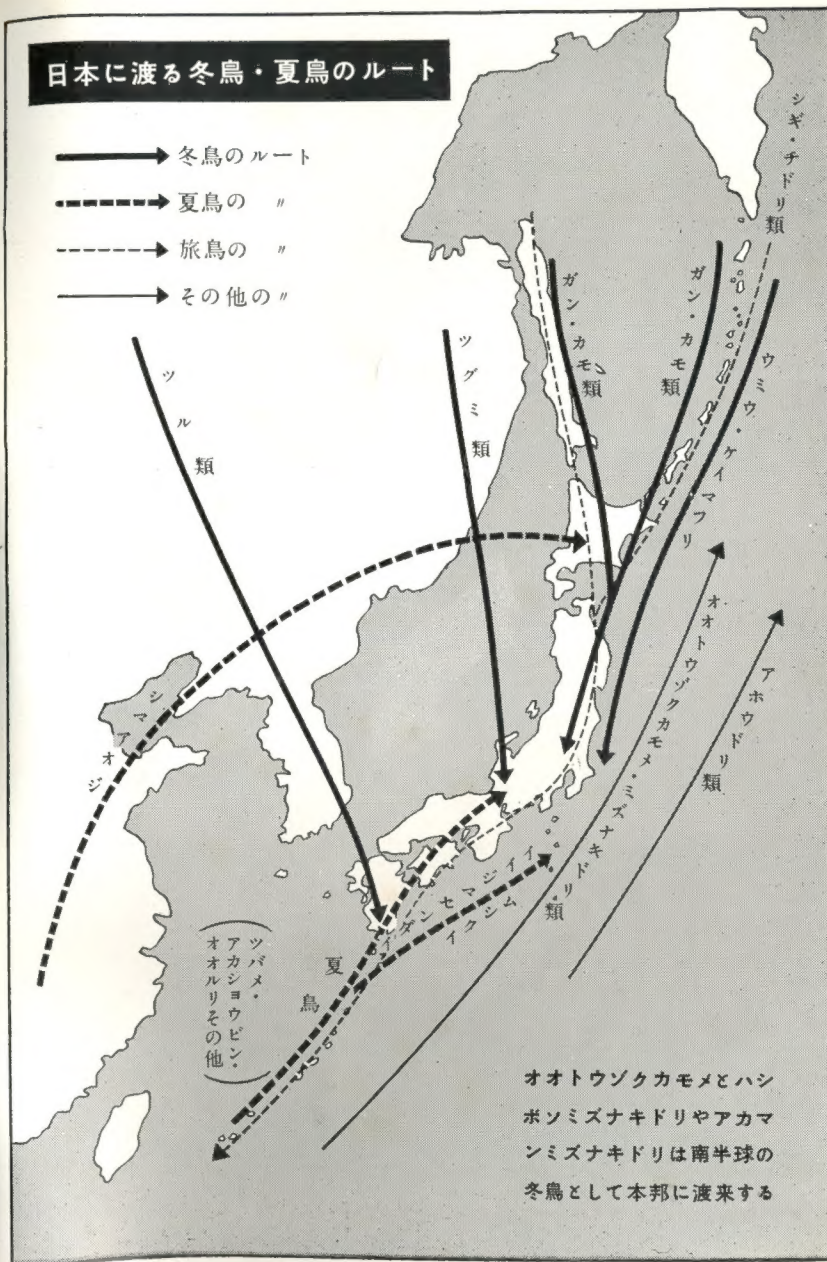
渡り鳥……2
干潟に群れる鳥……10
葦原の鳥……14
河川・湖沼へ来る鳥……22
雁……26
鶴が渡る村……30
春渡る鳥……38
森林に渡る鳥……44
人家に巣をつくる鳥……46
村里に渡る鳥……50
東北地方の海岸で繁殖する鳥……52
北海道の鳥……58

定価100円 1956年10月25日発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

日本に渡る冬鳥・夏鳥のルート

冬鳥のルート
夏鳥の 〃
旅鳥の 〃
その他の〃

シギ・チドリ類
ガン・カモ類
ガン・カモ類
ウミウ・ケイマフリ
ツグミ類
ツル類
シマアオジ
オオトウゾクカモメ・ミズナギドリ類
アホウドリ類
夏鳥
ツバメ・アカショウビン・オオルリその他

オオトウゾクカモメとハシボソミズナキドリやアカマンミズナキドリは南半球の冬鳥として本邦に渡来する

今年も田植の頃渡ってきたアマサギ（埼玉県鷲山）

渡り鳥

日本には五百二十三種の鳥がいるが、留鳥として一年中まったく移動しない鳥は非常に少い。渡り鳥には春、日本に渡って来て繁殖をし、秋に渡り去るツバメのような夏鳥、秋来て冬を越し春に渡り去るガンのような冬鳥、日本を通過するだけのチュウジャクシギのような旅鳥、夏は山地に、冬は平地に移動するウグイスのような漂鳥等がある。その他、台風に捲きこまれて飛来したり、渡りのルートを間違えて日本へ来る迷鳥がある。渡り鳥が日本に来たり、日本を去ったりする時期は、毎年ほとんど同じ頃であり、そのコースもほぼきまっているし、その繁殖地、越冬地、通過地もまた毎年ほとんどきまっているらしい。ところで、渡り鳥がなぜ渡りをするのか、何によって渡りのコースをきめるかという問題については鳥の生理の面と生態の面からの研究が必要だが、そのほんとうの原因となるといまだにはなはだ怪しげな想像説が多く、科学的に納得できるような結論はまだ得られていない。欧米では渡り鳥の研究は古くから行われており、金属製の標識を脚につけて放したり、ヘリコプターを利用したり、また各地の野鳥研究家の調査などをもとにして、あらゆる角度から、これを解明しようとしている。そして最近ではかなり細かな点まで明かになったが、日本では外国に比較すると非常におくれているといってよい。といってもこれは単に日本の学者の怠慢のせいではない。渡り鳥の研究はいうまでもなく、その北の繁殖地や南の越冬地での様子がはっきりしなければ一歩も進められないからである。国際的協力が是非必要なのである。

親　子

卵と雛

鷺山にすみわけるサギ類（上の方からチュウダイ，チュウサギ，コサギ）

鷺　山

埼玉県北足立郡美園村字野田、浦和市から十粁余りのところにある鷺山には、毎年三月末から四月初めにかけて、いろいろの鷺類がわたってくる。チュウダイサギ、チュウサギ、コサギ、ゴイサギ、アマサギ等一万数千羽といわれる鷺たちが、毎年同じある一定の竹藪や林に巣をかけ、卵を抱き、雛を育て、また秋には南をさして帰ってゆく。

巣

はじめて渡ってきた日

鷺山の写真は田中徳太郎氏提供

嵐の日

鷺と子供たち

鷺山で雛がかえり、ようやく元気に育つ頃、日本は台風の季節に入る。梢に枝を組合わせただけの粗末な巣は強風にふき落され、嵐の後の鷺山は落ちた雛で真白になる。子供たちはその雛を持ち帰り、育てて、また秋には巣へもどしてやる。田圃や小川からどじょうや魚をとってきて子供たちが育てた鷺は、また皆といっしょに南へ帰ってゆく。

雛を育てる子供たち

落ちた雛

巣立ち前の雛たち

巣立ちの練習

サギ類の採食地(大阪湾住の江)(9月)

サギ類の混群

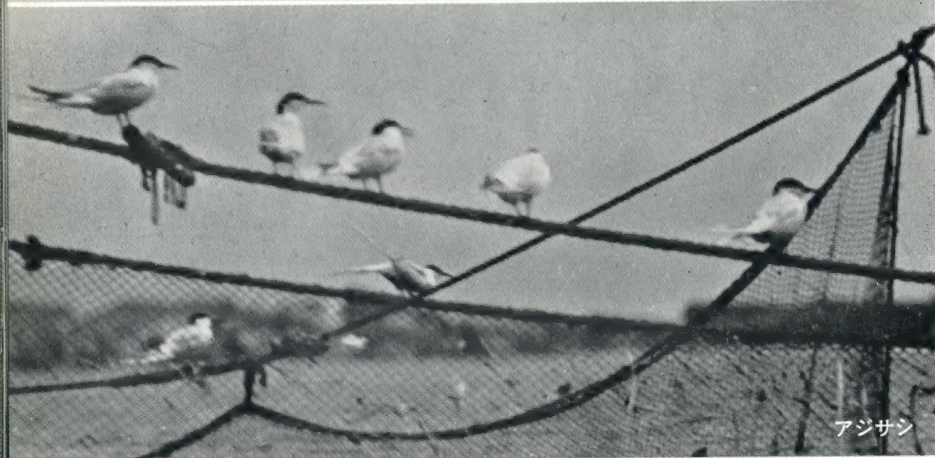
干潟に群れる鳥

干潟は鷺類、シギ、チドリ類や、鷗、トビなどの好い採食地である。とくに旅鳥のシギ、チドリが渡来する春と秋にはひとしお賑かになる。九月頃、大阪湾住の江の干潟にはアオサギ、チュウダイサギ、チュウサギ、コサギなどがおびただしい数で混り群れている。このうちコサギとアオサギは留鳥である。シギ、チドリの類は渡り鳥の中でもとくに大旅行をする鳥である。北は北極圏から南はオーストラリアあたりまでその翼で渡ってゆく。そして春は南から北へ、秋は北から南への足休めに日本を訪れる。オオソリハシシギは春四月上旬から七月上旬まで、秋は八月下旬から十月下旬まで日本にいるが、最も多いのは五月と九月から十月にかけてである。むかし都鳥として歌によまれたユリカモメは冬鳥で、今でも隅田川や皇居のお濠に沢山群れて冬を越す。この鳥は晩春になると夏羽にかわり、頭が黒く、くちばしも真赤になる。

オオソリハシシギ

ユリカモメ

オオソリハシシギ

チュウジャクシギ

アジサシ

チュウジャクシギ

キアシシギの渡り

コアジサシ

春や秋、干潟に群れるシギ類の中で、日本で一ばん数多く見られるのはキアシシギである。キアシシギは何百何千という群で飛来し、くちばしは彎曲せず脚が黄色い。声は澄んだよい声である。チュウジャクシギも大群で行動し、潮の満干につれて浅瀬のそこそこで餌を探す。とくに砂の中にかくれたカニを好んでついばむ。ピィーピィー、ピピ、ピピ、ピピ、ホィーヨ、ホィーヨと七声に句切る鋭い鳴き声には特徴がある。これらは旅鳥だが、その繁殖地ははっきりわかっていない。アジサシも旅鳥で春秋の海浜に群れる。これよりやや小形のコアジサシは夏鳥で、早春四月頃に渡来し、川口や川原の砂地に小さく凹んだ簡単な巣をつくって、そこで繁殖をはじめる。その卵は色も斑紋も小石にそっくりなので、見つけるのはなかなか困難である。コアジサシは八月になると早くも南の方へ移動をはじめる。この類は飛びながらたえず海の中の小魚をねらい、見つけると突きさすように舞い下りてこれをとる。アジサシの名はここからうまれた。

チュウジャクシギ

ツバメのねぐら（福島県五百淵）

⬆藤村和男氏提供

巣立ち近い子ツバメ

葦原の鳥

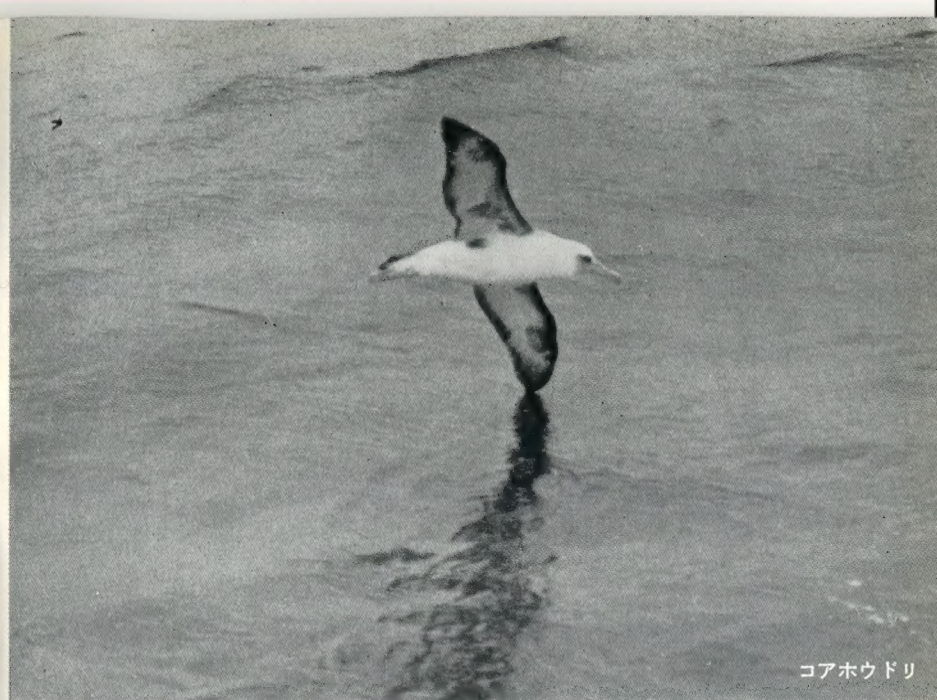
毎年ツバメが一番子、二番子をかえし、繁殖を終える七月下旬から八月頃になると、軒端から葦原へ塒を移して数千数万羽が群れ集る。秋田県の蒲古川、宮城県の伊豆沼、福島県の五百淵、新潟県の福島潟、埼玉県の荒川、千葉県の四戸前尻、山梨県の蕪の池、大阪府の橋寺町、島根県の宍道湖畔、山口県の幡生、鹿児島県の藺牟田池などがツバメの塒になる場所として著名である。早くは六月上旬から、遅いものでは時として十月上旬頃までこのような塒がみられる。

一般には、七月下旬から八月下旬までがその盛りである。

その頃、空には南をさして渡るムクドリ、コムクドリの大群が連日つづき、やがていつともなしにツバメが姿を消すと、それと入れちがいにコガモ、マガモなどの鴨類が冬鳥として北から渡ってくる。マガモは海湾に群れをなし、湖にはホシハジロ、キンクロハジロなどの鴨類が渡ってくる。

長野県安曇郡梓川原にて

ムクドリ

マガモ

コアホウドリ

コアホウドリとクロアシアホウドリ

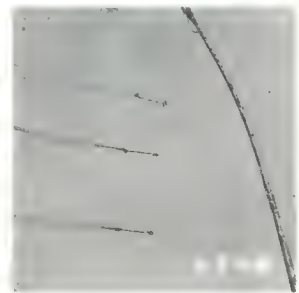
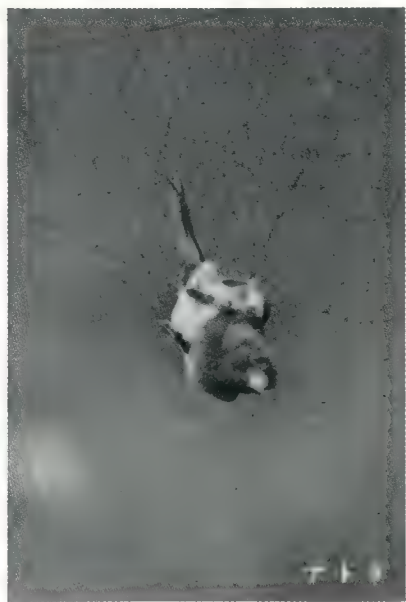
コアホウドリ

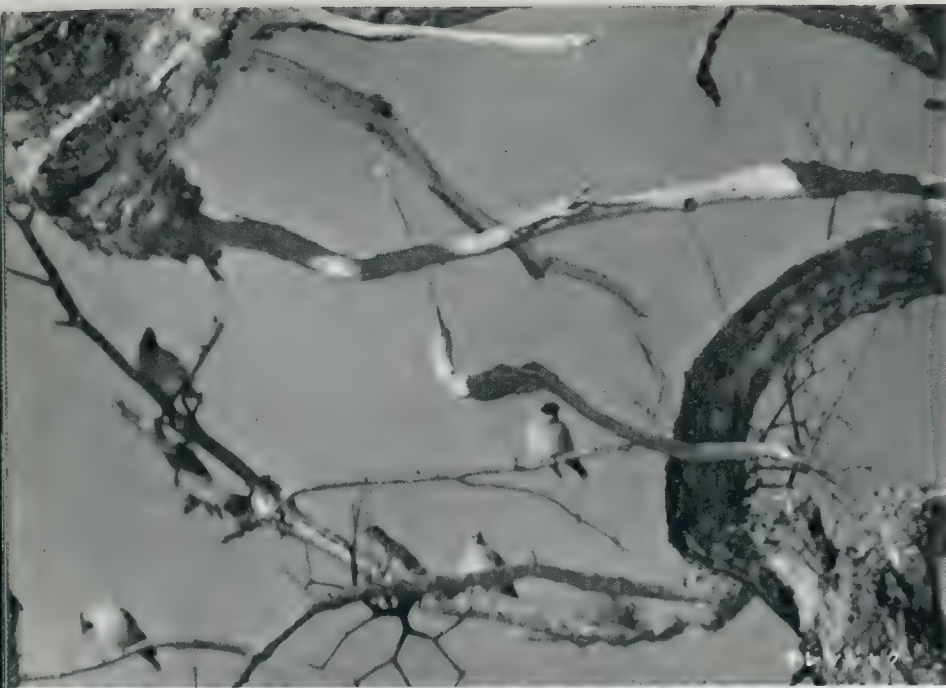
ウミスズメの死体

犬吠崎灯台

灯台と渡り鳥

渡りは鳥たちにとっては命をかけた冒険である。暴風雨や外敵による犠牲ばかりでなく、灯台の光に誘われて、その堅いガラスに衝突するものもおびただしい数だ。五月と十月はとくに多く、一晩に数千数万の鳥が無惨な死を遂げることも珍しくない。千葉県犬吠崎灯台ではウミスズメが数多く墜死した例があり、アシナガコシジロウミツバメなどの珍しい鳥が墜死した例もある。時には、アホウドリなどの海洋鳥が、台風で陸地に迷い込んで犠牲になる。

鳥屋場（とやば）

毎年秋になると、北の国からおびただしい数の小鳥たちがはるばる海を越え、峰々や谷谷を渡って、北陸や信濃路へやってくる。鳥たちの渡りのコースは毎年きまっているので、この地方の人々はそのコースに当る尾根に鳥屋場を設け、霞網を張って鳥をとらえることを何代も前から業としてきた。細い絹糸で編んだ長さ十二米、幅二米ほどの網を数十反も張りめぐらし、一年がかりで仕立てた囮（おとり）をその網のそばに籠（かご）鳥としておく。普通鳥は春にはさえずるが秋や冬はさえずらない。そのさえずらない鳥を秋、ちょうど渡りの頃、さえずるように仕立てたのが囮である。北の国から渡ってきた鳥の群はこの囮の声に誘われて鳥屋場に飛んでくる。すると、それを見張小屋で見ていた猟師は突然旗のようなものをヒューーと打ち振り、叫び声をあげる。それを鳥たちは鷹の羽音と思い急いでかくれようとして網にかかるという仕組である。可憐な小鳥を捕えるこの悪い猟法は今日は禁止されたが、かつては年に千万羽の鳥がとられた。

シメ

遠く山々に新雪をみる十一月頃になると、野や山には小鳥たちの大好きないろいろの木の実が枝一杯に熟れてくる。ノイバラ、ガマズミ、カマツカは赤い実を、ムラサキシキブ、ヤマブドウは紫色の実を、そしてヘソカズラは黄色の実をつける。この頃やってくるのはツグミである。谷々を埋める雲海の上を早暁からおびただしい数でキャキャ、キャキャとなきかわしながら渡ってくる。この頃にはまた北の方で夏を過したエゾビタキが南をさして飛んでゆくのも見かけられる。カシラダカ、シメ、アトリ、マヒワ、イスカ、シロハラ、マミチャジナイなどの冬鳥もたくさん渡ってくる。やがて十二月になり山野が雪で真白におおわれると、キレンジャク、ヒレンジャクの大群が来、ハギマシコ、オオマシコ、ベニマシコ、ベニヒワなどもやってくる。そして野や山は全く冬鳥たちの世界になる。

トモエガモ

ヨシガモ

オシドリ

キンクロハジロ

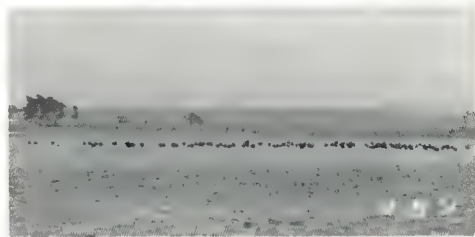
カルガモ

河川・湖沼へ来る鳥

川や湖、沼には冬鴨のはしりとしてコガモがまずやってくる。八月下旬から九月上旬頃少数が渡来し、やがて九月下旬から十月になるとおびただしい大群が渡ってくる。それについではオナガガモ、ヨシガモ、キンクロハジロなどが次々に渡り、水面は鴨の群におおわれるばかりになる。この頃にはまた、十和田湖のような山中の湖沼で繁殖するオシドリや、平地の水田、沼などで繁殖するカルガモなども大群であちこちの湖沼に群れはじめる。十一月の鴨猟の時期になると安全な禁猟区に多く集ってくる。これらの鴨類は昼間は禁猟区の湖沼や広々とした海湾に群れて安眠をむさぼり、夕闇がせまると水田に飛んで行って夜のうちに餌をあさる。渡り鳥として日本に渡来する鴨類は北海道以北、とくに樺太、カムチャッカなどで繁殖するものが多い。

海湾にはビロウドキンクロやウミアイサなどの鴨類やヒメウなどが冬鳥として渡来する。農村に近い灌漑用の小池などでもそのあたりが禁猟区であれば数多くの鴨類が集ってくる。オオハクチョウやハクチョウの渡来地として名高い新潟県の瓢湖などはそのよい例で、何万羽というおびただしい鴨類の群がのんびりと水面に浮んでいる。このような湖沼にはトモエガモなども多い。鴨類の中でも、ビロウドキンクロやクロガモ、ホシハジロなどのように貝類を主食とするものは貝の多い浅い場所に群れ、カワアイサやウミアイサのように魚類を主食とするものは岩の多い磯に群れて、波間に潜っては小魚をあさっている。アイサガモはそのくちばしに歯形の突起があるので魚をとらえるには具合がいい。ヒメウは主として千島方面で繁殖する鵜の一種だが、冬には各地の沿海に多く、ウミウなどといっしょに群をつくり、やはり岩礁の上に休んでいる。これも水に深く潜ることが巧みでよく魚をとらえ、時には一群をなして包囲するようにして波間に魚を追っていることがある。鴨の類が北の繁殖地へ帰ってゆくのは三月上旬から五月にかけてである。

ビロウドキンクロ

雁

雁も冬に来る鳥である。マガン、ヒシクイ、カリガネ、オオヒシクイ、ヒメヒシクイ、サカツラガン、ハクガン、コクガン、シジュウカラガン等々。日本へ来る雁の種類は多いが、その数はだんだん少くなった。以前は数多かったマガンやヒシクイさえ最近は非常に減っている。ハクガンやシジュウカラガンは明治の頃まではよく来たがこの頃では殆ど来ない。サカツラガンも最近は極めて稀になり、コクガンも本州の沿海に少数渡来するだけになった。彼らは夏、シベリア地方で繁殖し、九月から十月頃に日本へ来て、翌年の三月にはまた北をさして帰ってゆく。よく晴れた夕方の空を雁が一列になり、竿になったりカギになったりして渡ってゆく様は実に美しい眺めだが、近頃都会では殆ど見られなくなってしまった。

↑植松蓊氏提供

オオハクチョウ

オオハクチョウ(北海道風蓮湖)

オオハクチョウ(青森県小湊浅所湾)

オオハクチョウとコガモ

ハクチョウ、オオハクチョウの渡来地としては北海道の風蓮湖と青森県の小湊浅所湾が著名。風蓮湖には十月下旬に早くも数千羽が渡来し、小湊にも七百羽ぐらいが渡ってくる。小湊では十二月下旬から二月下旬にかけて最も鳥の数が多い。時には宍道湖や琵琶湖にも渡るがその数は少い。新潟県瓢湖では愛鳥家吉川翁の努力で飼鳥のように馴らされている。冬は雌雄一つがいと幼鳥の家族群で生活する。

オオハクチョウ

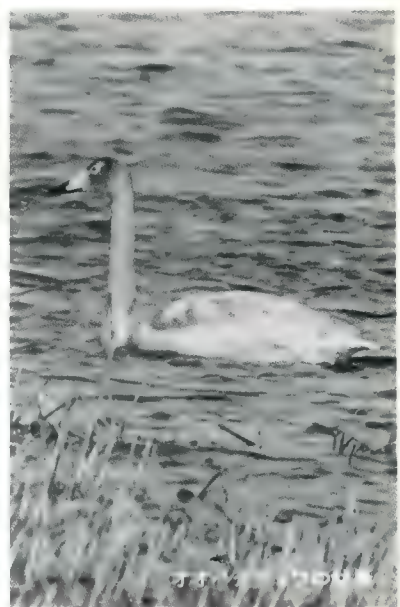
オオハクチョウの幼鳥

ナベヅル・[illegible]タンチョウ(荒崎)

[illegible]

鹿児島県荒崎(出水郡 阿久根市付近)

鶴が渡る村

ツルをみる人(荒崎の田圃で)

鶴が渡ってくるので有名なのは山口県八代村と鹿児島県の荒崎とである。八代村にはナベヅルだけが三百羽ぐらい渡来し、荒崎にはマナヅル三百羽、ナベヅル三千羽ぐらいが渡ってくる。いずれもシベリア、満州、蒙古などで繁殖し、十月か十一月頃、冬鳥として日本へ来る。昔、といっても明治の前までは、これらの鶴が日本の各地にたくさん渡ってきていた。とくに江戸の周辺は将軍の猟場として一般の狩を禁じたので鶴の数も多く、タンチョウなども来ていた。ところが明治になって特別に鶴を保護しなくなると、たちまち人々にとりつくされてしまい、今では容易に鶴をみることもできなくなった。それ故、八代村や荒崎の鶴は天然記念物として大切に保護されており、シーズンには沢山の見物人がやってくる。昔からこの二つの村では鶴を大切にし、大正から昭和の初め頃には年に二百俵のモミを鶴のためにまいていたという。

山口県熊毛郡八代村

八代村と荒崎の写真は一部富重安雄氏提供

はばたき

採食のため阿寒に

タンチョウ

九州の荒崎などにごく稀に渡ってくるタンチョウは冬鳥だが、北海道の釧路(くしろ)地方にはタンチョウがおよそ七十羽ぐらい一年中すんでいる。しかもその雪裡(せつり)川流域の広漠とした大湿原では繁殖さえ行われている。この繁殖地は近年発見されたものだが、現在日本で知られているただ一つのタンチョウの繁殖地でありタンチョウは特別天然記念物として大切に保護されている。この鶴は頭の上に真赤な皮膚が露出し、眼先、喉、前頸から頸の側面にかけて黒色、翼の次列、三列の風切羽は黒色で長く伸び、尾をおおいかくしている。この鶴は昔からおめでたい鳥として特別に扱われ、絵などにもよく描かれているが、タンチョウの飛んでいる絵はほとんどが間違って、尾の先を黒く染めている。地上に下りたとき尾の先が黒くみえるのは、実は翼の後端で、飛んでいる鶴の尾は白いのである。

砂の上の足跡

クロツグミの雛と巣

クロツグミの巣

アカモズ

春渡る鳥

春になり、ツバメが街道をスイスイと飛びかわし、ウグイスが草むらでさえずりはじめる頃になると、南からやってきたいろいろな夏鳥たちが姿をみせるようになる。やがてオニグルミが長々とその花房を垂れる初夏になると、夏鳥のオオルリ、アカモズ、クロツグミの姿やさえずりが森のギチギチとなく声やクロツグミのピョイ、ピョイ、キョコ、キョコとなく声は初夏の森の美ピッ、ピッ、ピィ、ピィ、ピィ、ここかしこに見ききされるようになる。とくにオオルリのピッ、しい音楽である。オオルリは渡ってくるとすぐ小高い梢にとまり、美しい瑠璃色の羽を陽の光にきらめかせながらさえずりつづける。この頃、山里の谷間では夜になるとボーボーという無気味なミゾゴイの声がひびきわたってくる。やがて六月になり、その巣で雛がかえるころになると、ミソゴイの鳴き声はまったくひとびとに聞かれなくなる。

オオルリ

オニグルミの花

ノビタキの雌

ノビタキの雄

キジバトの雛

高山の残雪が目に見えて日毎に消えてゆく六月の頃、山麓の高原ではノビタキの雄が草の穂先でしきりにさえずりつづける。やがて夏鳥のセンダイムシクイが草原の土の上に巣をつくって卵を抱く頃には、あたりの山村では漂鳥のキジバトの雛が卵からかえる。小枝を組合わせただけの簡単な巣の上ではレモン色の毛糸に似た産毛のキジバトの雛が親鳥を待ってかすかな声でないている。草原ではノビタキの巣もでき上る。七月になるとノビタキの雛も卵からかえり、雌鳥は絶え間なくあたりを探しまわって餌をくわえてきては雛に与える。同じ草原では夏鳥のヨタカが土地の凹みに産んだ二個の卵を一心に温めている。土色にカモフラージュしたヨタカはあたりを人が通ったぐらいでは微動もしない。だからなかなか気づかれない。とくに雛のかえるのが間近くなると人間が目の前で観察するくらいでは決して驚かない。かえって頭を上げ下げし、口を大きくあけて、人を威嚇しようとさえする。

初夏の乗鞍岳

マミジロ

トラツグミ

トラツグミの雛

フジマミチャジナイの雛

フジマミチャジナイの雌

五月頃、山村では漂鳥のトラツグミが巣をつくって抱卵をはじめる。この鳥は早朝や夜間、あるいは曇った日などにヒョーヒョーといかにも悲しげな声で静かになくので、昔の人はヌエの声だといって恐ろしがった。ツグミの中では一ばん大きく、一部は台湾や中国南部、マレー方面にも渡るが、西日本の森では冬も珍しくない。トラツグミが抱卵をはじめる頃、夏鳥のアカハラやマミジロはそれぞれ雛を育てるのに忙しい。マミジロは北海道と本州の山地で繁殖するが、とくに本州中部の標高千五百米前後の森林中に多く、繁殖期には高い木の梢にとまってチョボー、チーと美しい声でなく、冬は中国南部、マレー、インドシナなどにわたって冬を越す。またこの頃、富士山麓ではフジマミチャジナイも忙しげに雌雄協力して餌を雛に運んでいる。フジマミチャジナイは、秋に日本へ渡ってくるマミチャジナイよりも、喉のあたりが白いので区別される。

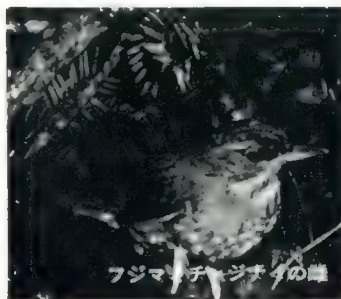
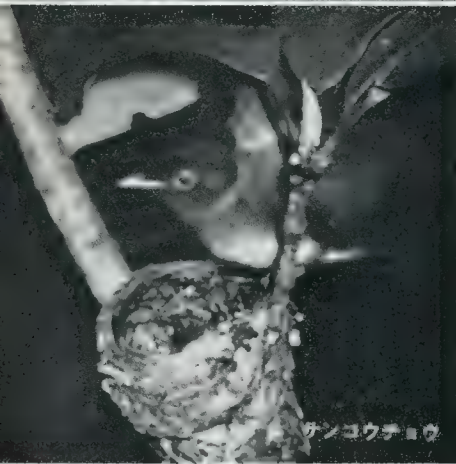
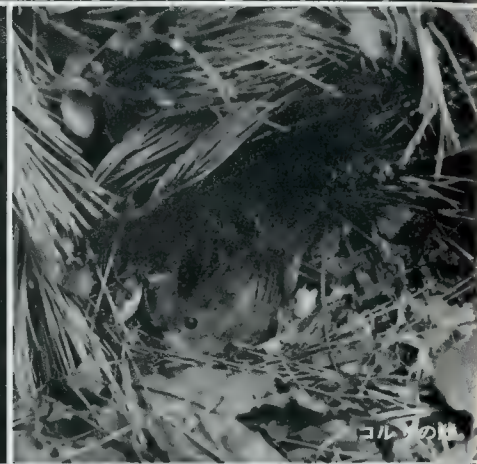
コサメビタキ

サンコウチョウ　コルリの雛

ビンズイ

アカショウビン

森林に渡る鳥

カッコウの子

山の森かげにホオノキの花が咲く五、六月頃、長雨をついてキョロローというアカショウビンのさえずりが盛んである。昔の人は水恋鳥などと歌に詠んだ。この頃山林ではサンコウチョウ、コサメビタキ、アカハラなどの夏鳥も繁殖し、漂鳥のトラツグミの雛も巣立ちをはじめる。黒に黄色の虎斑をちらしたトラツグミの雛は親鳥とまったく同じ斑紋の美しい鳥である。また高原の大空にはカッコウの雌雄がなきながら追いつ追われつしているが、やがて草原の灌木に舞い下りた雌は、あたりでしきりに巣をつくっているビンズイの行動をじっと見守る。巣ができたらその中に卵を産むためである。カッコウはビンズイのほかにも、モズ、アカモズ、ホオジロ、ホオアカ、アオジ、ノビタキなどの巣に卵を委託し、自分では決して抱卵や育雛をしない。

コシアカツバメ

イワツバメ

人家に巣をつくる鳥

ツバメ、イワツバメ、コシアカツバメなどは夏鳥として三、四月頃日本へ渡り、人家の軒端に毎年巣をかける。イワツバメは北海道、東北、本州の山地に多く、コシアカツバメは北陸、関西、四国方面に多い。泥や藁などの巣材を運び、くちばしを使って巣の形をつくるが、ツバメやイワツバメの巣は椀形で、コシアカツバメの巣は徳利形である。これらのツバメは一番子、二番子をかえし、一つがいが平均七羽の雛を育てる。秋になると彼らは揃って南の方へ渡る。コシアカツバメは中国南部やビルマ、イワツバメは中国南部やマレー半島、ツバメはインド、インドシナ、マレーからさらにオーストラリアまで渡ってゆく。ツバメのほかには夏鳥のコムクドリも人家の屋根などに巣をかける。夏は北日本に多く、秋になると南へ渡るために九州方面に群れる。この地方ではこのコムクドリの群をバメキと呼ぶ。

イワツバメ

日本で冬越しするツバメ

ツバメは渡り鳥の中でも代表的なものだが、このツバメが日本で冬を越すという珍しい例がある。静岡県浜名郡篠原村馬郡、浜名湖のほとりにある鰻の養殖場のある事務所に、毎年秋になるとツバメが渡ってきて冬を越す。この家は昭和二年に火災で全焼したが、翌年の十一月頃、新築した事務所に二百羽ほどのツバメが渡ってきた。はじめはほうきや竹竿を持ち出して大騒ぎをしたが、それでもツバメは毎年やってくる。とうとう、この家ではその五坪ばかりの事務所をツバメのために提供し、天井に十五本の電線をはってツバメの世話をしてやるようになった。その越冬日記によると、毎年十一月になると見えはじめ、十二月になると急に数がふえて三百羽ぐらいになり、三月末頃から去ってゆく。寒い雪の日などには死ぬツバメもあるが、朝は家人が戸を開けると飛び出し、四粁位の範囲を飛び廻って、日が沈む頃に帰ってくるという。

この両頁の写真は水野一道氏提供

ウゲンボウの巣

村里に渡る鳥

ブッポウソウは鳩より少し大きく体は緑青色、喉の辺りと尾と翼は濃い紫、くちばしと脚は真赤な美しい鳥である。四、五月頃日本へ渡り、神社仏閣の森や農村の人家に近い木の洞に巣を作る。時には人工の巣箱にも三個位の純白の卵を産む。この鳥はゲッ、ゲッ、ゲッとなき、美しい声ではない。この鳥が好んですむ寺院等の森では、夜になるとよくブッポウソウという鳴き声がきこえるので、昔の人はこの鳥のものと思いこんで、仏法僧の字をあてはめた。しかし、近年ラジオで野鳥の鳴き声を放送することが発達し、野鳥の生態研究も進歩した結果、ブッポウソウとなく主が実はコノハズクであることがわかった。チョウゲンボウは鷹の一種で夏は山地にすみ冬は平地や海岸に多い漂鳥である。村里近い川原の絶壁に凹みをみつけて巣をかけ、集団で繁殖する。山梨県笛吹川原は最近発見された繁殖地だ。

山梨県韮崎市笛吹川原にて

東北地方の海岸で繁殖する鳥

東北地方の海岸や島では夏鳥のアマツバメや漂鳥のハヤブサ、ウミウやウミネコなどがいたるところで繁殖する。岩手県釜石湾にある三貫島は人の住まない孤島だが、海鳥類の繁殖地として天然記念物に指定されている。

ハヤブサ

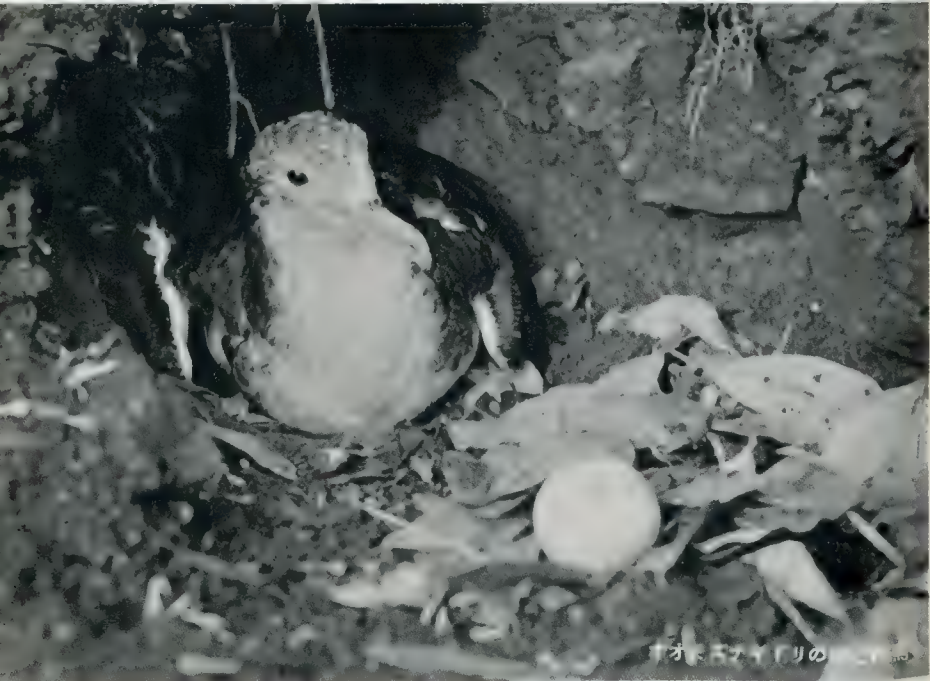
アマツバメは島の岩壁の亀裂に巣をつくり、ウミネコも何万羽と群をなして岩壁に巣をかけて産卵する。アマツバメは非常に速く飛ぶ鳥で普通は時速一一〇粁、必要に迫られれば一六〇粁を出すといわれる。ハヤブサが獲物を追う速力は二五〇—三〇〇粁位で、古くから鷹狩に用いられた。ウミウは長良川などで鵜飼に使われる鳥で、冬、本州沿岸の休息地の岩壁などにいるところをモチを使ってとらえる。しかし、これに近縁のカワウは樹の上に集団で巣をかけるが、あまり鵜飼には使われていない。

岩手県三貫島

ウミウ

オオミズナギドリの巣に親鳥

ヒメクロウミツバメ

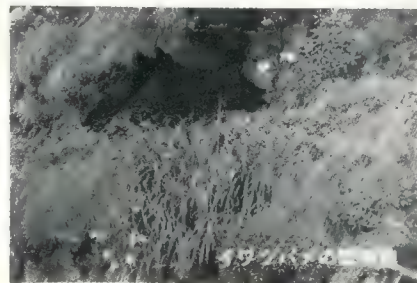
オオミズナギドリの[illegible]

三貫島は南方系植物のタブの北限としても著名で、その原生林は昼も暗いほどである。毎年六、七月になるとオオミズナギドリが何万となくその森林に飛来し、土に穴をあけて一個の卵をうむ。日暮になると沖から陸続と鳥が帰り、ばさりばさりと森の中に舞い下りて穴へ入り、ピョウイ、ピョウイ、グワーエ、グワーエと無気味な声を上げる。この島ではヒメクロウミツバメも繁殖し、穴の中に巣を営んでいる。

イワツバメの[illegible]

[illegible]の[illegible]

ケイマフリ

ミサゴの雛（巣立ちの練習）

ミサゴの巣

ミサゴは日本の沿岸各地で繁殖し、多くは孤島の岩壁や海岸の林の喬木の梢などに巣をかける。巣では雌がたえず警戒をつづけ、あやしいものを発見するとキイッ、キイッと鋭い警戒の叫びをあげる。雛はこれを聞きつけると、ぴったりと巣の上に身を伏せる。すると羽の色や斑紋が巣とまったく見分けられなくなってしまう。やがて危険が去ると雛は翼をひろげ、巣立ちの練習をはじめる。ミサゴは海岸や川辺にすんで魚類を主食とするが、水面の上空を飛びながら餌をあさり、魚を発見すると翼をつぼめて急降下し鋭い爪でこれをとらえる。海岸にすむものはボラをよく捕える。ケイマフリは岩手県の三貫島や北海道の厚岸湾、天売島などで繁殖する海鳥で、全身が黒く眼の周囲だけが白い。脚は真赤で、飛んでいるときよく目につく。俗にアカアシの名がある。冬は本州中部の沿岸に渡るが、本州西部や四国、九州方面には現われない。冬は体の上部や翼は夏と同色だが、下面は白くなる。夏と冬で色のかわる鳥は珍しくない。

ミサゴの巣をかける孤島

ミサゴの巣（雌と雛）

コシジロウミツバメの親と卵

エトピリカ

オオセグロカモメ

オオセグロカモメ

北海道の鳥

北海道は釧路に近く、厚岸湾の口にある大黒島では、千島付近と同じ北方系の海鳥類や陸鳥類が繁殖をする。海鳥類ではウミウ、オオセグロカモメ、エトピリカなどが絶壁や岩礁の上に巣をつくって繁殖し、また、海洋鳥のコシジロウミツバメは島の草原の土の中に穴をあけ、その奥に卵を産む。草原にはコシジロウミツバメの掘った穴が無数にあいている。この鳥は昼間は一羽だけが卵を抱いているが、日暮になると他の一羽が沖から帰って来て交替する。また、抱卵中の親鳥に手をふれると生臭い液体を吐きかけて威嚇する。オオセグロカモメは冬には本州中部以北の太平洋岸にも珍しくないが、それより南では非常に少い。北海道では冬、各地の漁場や湾内に多数群れている。エトピリカも冬は本州まで南下するが、太平洋岸では宮城県、日本海側では新潟県までで、それより南ではごく稀である。コシジロウミツバメは本州や伊豆七島方面まで渡る。

ウミガラスの親

ウミガラスの雛

ウミガラス

北海道の苫前町から三時間ほど沖にある天売島はウミガラス、ウトウ、ケイマフリ、ウミスズメ、ウミウ、ウミネコなどの海鳥類の繁殖で著名で、天然記念物に指定されている。とくにその赤岩では何万羽というウミガラスが繁殖する。この地方では、そのウルルン、ウルルンという鳴き声からオロロン鳥とよんでいる。ペンギンに似た直立の姿で岩棚の上に沢山並んで抱卵する。卵は洋梨形で細長く、危険な岩棚の上に巣材もなく産みっぱなしだが転がってもその鋭端を中心にして円を描くだけだ。

波に飛ぶウミガラス

孵化した雛は全身に綿毛があり、数日すると早くも海上におよぎ出して行く。天売島ではケイマフリ、ウトウなども大群で繁殖するが、ケイマフリは岩と岩の間に産卵し、ウトウは土中に孔を掘ってその中に卵を産む。ウミウは岩棚に巣をかけ、ウミネコは主に岩壁の草付に巣をかける。太平洋岸の大黒島で繁殖するオオセグロカモメは日本海側の天売島では数が少い。ウミガラスは冬本州北部に渡来する。

北海道天売島の赤岩

子をつれて泳ぐウミアイサの雌

オカヨシガモ

ウミアイサ

ウミアイサ

北海道の阿寒湖では、本州では繁殖しないオカヨシガモやウミアイサが繁殖する。オカヨシガモは広く欧亜大陸、北米、北アフリカに分布し、日本には冬鳥としてわずかに渡来するが、本州以南では極めて稀である。この鴨が北海道の湖沼で繁殖することは昭和三十年夏、清棲幸保氏が発見した。ウミアイサは欧亜大陸中北部と北米の中部以北で繁殖し、冬は北アフリカ、中国南部、インド、カリフォルニアなどに南下する。北千島でも繁殖するが、北海道での繁殖はこれも清棲氏によって確認された。冬期には本州以南でも内海や湾内に大群をみることができる。この他、マリモの沈む阿寒湖岸の葦原ではカイツブリ類のアカエリカイツブリも繁殖し、のどかな様子で水の上に浮んでいる。また、北海道では鷲や鷹の仲間のチゴハヤブサも繁殖する。チゴハヤブサは本州や四国などでも冬期にはごく稀にみることができる。

北海道阿寒湖

岩波写真文庫目録

既刊

1 木綿
2 昆虫
3 南氷洋の捕鯨
4 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19 川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大佛
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 佛像
43 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47 東京—大都会の顔—
48 馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54 水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65 ソヴェト連邦
66 能
67 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97 システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105 宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 寫楽
111 熊
112 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 佛教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本
—1955年10月8日—
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る

新刊

200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県

近刊　ブラジル　ルーヴル美術館　北海道(南部)—新風土記—

B 6判　64頁　写真平均200枚　定価 各100円

山口県熊毛郡八代村の鶴の墓